

渋沢栄一と深川 ①

実業界に身を投じるまで

渋沢栄一は、天保11年（1840）2月13日、武蔵国榛沢郡血洗島村（現・埼玉県深谷市血洗島）に生まれました。父の市郎右衛門は、家業の麦作や養蚕のほかに、藍玉の製造販売によって資産を築き、名字帯刀を許され、名主見習いを勤めました。

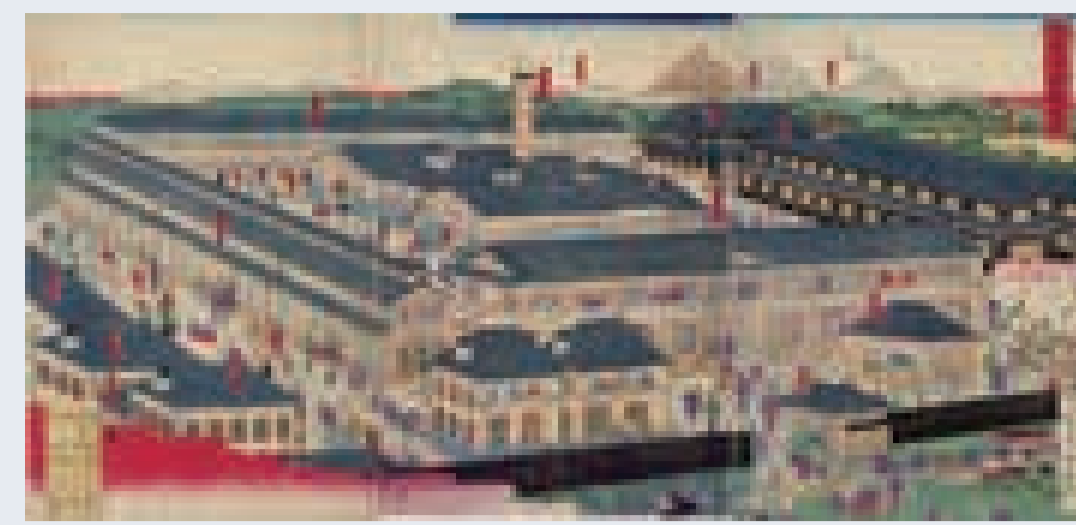
栄一は13歳頃から家業を手伝いはじめて熱心に勤め、商売の感覚を磨いていきました。一方で、学問の師匠である尾高惇忠などの影響から尊王攘夷思想に共鳴し、江戸に出てさまざまな人と交流を持つようになります。文久3年（1863）、攘夷実行のため、高崎城の襲撃と横浜の外国人居留地の焼き打ちを計画しましたが、同志からの説得などもあり、結局中止しました。この嫌疑から逃れるために、栄一は従兄の渋沢喜作とともに京都へ出奔し、一橋慶喜に仕え、家臣として精勤しました。慶応2年（1866）、慶喜の15代将軍就任に伴い、幕臣になると、同3年（1867）、慶喜の弟徳川昭武に従い、パリ万博使節団の一員としてフランスへ渡航することになりました。翌年の帰国までの間、欧州諸国の先進技術、社会・経済の制度などに触れたことは、後の栄一の活動に影響を与えました。帰国後は、幕府崩壊にともない慶喜が謹慎していた静岡を訪れ、欧州で学んだ合本組織に基づく「商法会所」を設立しました。これは銀行と商社をあわせたような組織で、栄一が中心的な役割を果たしました。

明治2年（1869）、明治政府から出仕を命じられた栄一は、民部省・大蔵省に勤務し、度量衡、租税制度、銀行制度など、日本の近代化に必要な制度の導入を手掛けました。しかし、財政をめぐる意見の対立や、実業界における人材不足などを痛感した栄一は、同6年（1873）に大蔵省を退官し、以後、実業界での仕事や社会・公共事業に邁進していくことになります。栄一は、同年日本橋に創設された第一国立銀行の総監役（同8年に頭取）に就任し、以後多くの会社の設立や育成に関わりました。

渋沢栄一と飛行家アート・スミス
(江東区教育委員会所蔵)

江東区 ゆかりの人

渋沢栄一



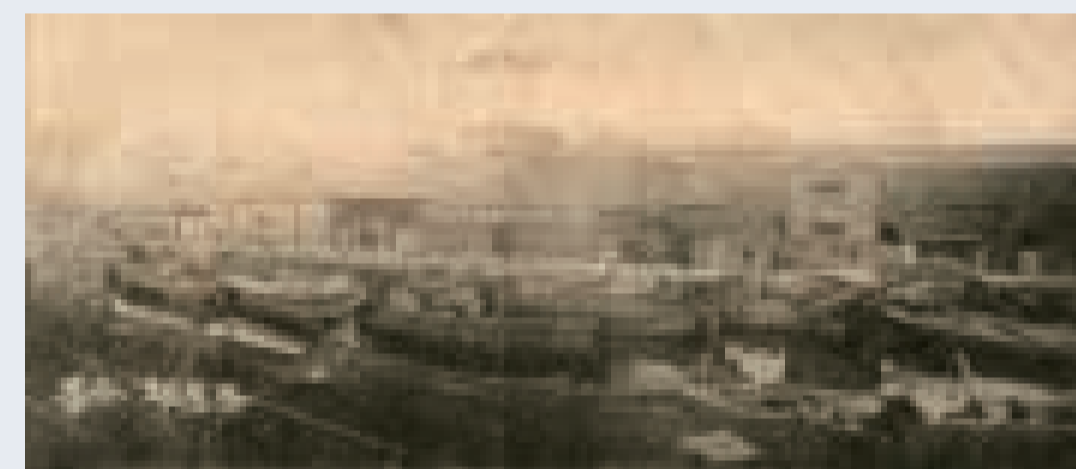
一躍斎国輝「上州富岡製糸場」
(国立国会図書館デジタルコレクション)



第一国立銀行(『第一銀行五十年小史』)
(国立国会図書館デジタルコレクション)



『新撰東京名所図会』(個人蔵)



絵葉書「大日本人造肥料株式会社」(部分)
(江東区教育委員会所蔵)
※東京人造肥料会社より社名変更

